

集した『論集近世女性史』はその新しい近世女性史の一つの大きな成果であると思います。その中に長島淳子氏の「幕末農村女性の行動の自由と家事労働」という論文は女性の年齢を区別して、嫁の自己達成と姑の自己達成について論じました。ジェンダー概念を含めて女性の役割と男性の役割を家事経済の面から分析する研究もあります。なお、脇田晴子氏が編集した『ジェンダーの日本史』という論集があります。こういう女性史の研究法は、伝統的な歴史学の関心——例えば幕藩体制の本質——を別にして、女性が直接に経験した歴史的状況を中心にしました。そうすると、新しい分野——例えば産婦人科の歴史——が創造されて、興味深い論点ができあがってきました。しかし大口勇次郎氏と薮田貫氏以外には、女性史に関して研究する学者は殆ど女性です。なお、もっと一般的な大きい問題について論じる歴史学者は、女性であっても女性史を殆ど無視しています。

だから、今後の展望というと、女性史を近世日本の一般歴史に統合することです。農村の経済発展における女性の役割について深谷克己氏と川鍋貞夫氏が論じたことがあります。農業史に関する研究の中に女性の特徴的な役割と役割の変化が必ず現われるかどうかについてちょっと疑問を持っています。経済史以外には、どうでしょうか。一つの示唆的な論文は長野ひろ子氏の「幕藩制国家の政治構造と女性——成立期を中心に」です。長野氏はエリート女性の立場から幕藩体制を分析して、歴史学の大きい問題に関して新しい視点を持っています。

そうして、政治経済問題を含めて、女性と男性の区別をはっきりさせるジェンダーという概念を、歴史学者の関心にいれていくことが、今後の課題ではないでしょうか。

## 元留学生からの提言

許 栄恩

私は1984年お茶の水女子大学に国費留学生として来日しました。当時は中曽根首相の留学生10万人計画が盛んに唱えられた時期でありましたが、それでもお茶大の留学生は40名ほどで、とても家族的な雰囲気でした。それが今は正規の留学生だけで100人を越えるまで成長して来たそうで、誠に今昔の感を覚えます。

当時の韓国からの留学生たちは今は韓国のいろいろな大学や高校で日本語や日本文学を教えています。就職して欲しい6、7年になる人がもっとも多いと思います。帰国して間もない頃は職探しや職に就いてからは慣れない先生業に試行模索の毎日だったと思います。私も今年就職6年目を迎え、サバチカルを利用して再び日本に来ました。ちょうどこういう時期にお茶の水女子大学に国際日本学という新しい専攻が生まれたことは実に時宜に適ったものだと思います。これからこの国際日本学が国際的なつながりを持つことを祈りながら、元留学生の立場から「新しい日本学構築」の為の提言をしたいと思いません。

## 1. 帰国留学生の悩み

### (1) 資料不足

現在、帰国した留学生の共通したもっとも大きい悩みは資料不足です。韓国の首都であるソウルのほんの一部の大学を除いて日本関連の資料は非常に粗末な状態であります。初歩的な日本語を教えるための教材はかなりの数に上りますが、文学の場合は一特に古典文学の場合はより深刻でありますが一教材にしる、研究用にしる資料が非常に少なく、殆ど個人の蔵書に頼っている状況です。現在国際交流基金で毎年一つの大学に20万円ほどの教材を寄贈していますが、それは大部分日本語教育に偏っています。

この資料不足を解決するための一つの案としては、日本で要らなくなった専門書を寄贈してもらう方法です。それには送るための費用の問題、受ける側の態勢の問題など、いろいろ解決すべき問題があると思いますが、海外での日本語教育の活性化の為にぜひとも考えてもらいたい事だと思います。

### (2) 視聴覚教材の開発

最近の学生は「テレビ世代」で、いわゆる「見ること」に慣れている人たちです。それにコンピュータの普及も手伝って、韓国では最近インターネットを使った遠隔講義や衛星講座といったものが活発に試みられています。このようなマルチメディアを使った講義をするためには日本関連のスライドとか、ビデオ、CD-ROM等の視聴覚教材が必要となりますが、日本でもっとこういう教材の開発に力を入れていただきたいと思います。

## 2. 帰国留学生に対するサポート

### (1) 宿舎、研究室などの支援

80年代の留学生と今の留学生の留学に臨む態度の一番の違いは博士学位に対する姿勢とも言えます。1980年代は日本の大学で人文学の分野ではあまり博士号を出していない時期でありました。それが今は博士課程に入学すれば、学位をもらうのが既定の事実であるかようになっていきます。また韓国の大学の雰囲気も以前とは変わりました、現在は日本関係の分野でも学位を要求するようになりました。私の場合も今回博士論文を準備するために日本に来ましたが、大学の方に研究員のための宿舎や研究室がなくて苦労しています。これからは私のように学位のために日本に戻ってくる人が益々増えてくると思いますが、このような研究員のための支援が必要だと思います。

### (2) 交流の場

帰国した元の留学生たちは本国での生活に忙しく、いままで日本と緊密なつながりが持てませんでした。それにまたお互いのつながりもありませんでした。そういうところに今回のシンポジウムが開かれ、かつての留学生の名簿づくりや資料などを送ることを期に、新たな留学生との交流が芽生えてきたと思います。そういう意味で今回のシンポジウムの開催は、私達元の留学生たちにもお茶の水女子大学とのつながりを新たにしたという面で意義深いものがあつたと思います。できれば毎年このような事をきっかけにみんながまた日本に来られる契機を作っていくのもいいと思います。

もう一つ提言したいのは、インターネットを通じて留学生のためのホームページをつくることです。このホームページによって大学側と留学生との交流、また留学生同士の交流ができれば、留学生たちも

日本や母校をもっと身近に感じるようになるのではないかと思います。また、日本学を世界に広げるためには海外にいる学者との共同研究も進めるべきだと思います。そのためにはたくさんの研究費が必要です。このような共同研究によってお互いの視野が広がるし、日本学も国際化できると思います。

## フロアーからの発言

### ブラジルで教えて

鈴木 泰

私はかつてブラジルのサンパウロ大学の日本文化研究所に客員教授として行ったことがあります。もう10年ほど前のことになりますから、現在とは大分事情は違っていると思いますが、そのころの経験でもまだいくらか現在と共通する問題はあると思いますので、その時の経験をもとに話させていただきます。なお、その時ちょうど、国際交流基金の主催で中南米の日本語教師に対する巡回指導というものが行なわれており、それに参加する機会を得ましたので、その際に回ったアルゼンチン、メキシコでの経験もとりまぜてお話ししたいと思います。

私ははじめサンパウロ大学ではいわゆる日本語教育をしてくれということだと思っておりましたが、そのうちに、古文や漢文について教えてほしいのだということが分かってきました。なぜそうなのかというと、現代日本語については現地のスタッフで十分教えることができるが、古典はそうはいかないからだということでした。さいわい、現地で用いられていた日本語の文法の教科書はほとんどかつて日本の中学で用いられていた現代語文法の教科書と枠組み、および内容が同じものでしたので、同じ枠組みの高校生用の古典文法の教科書をそのまま使うことができました。なぜ、最近の日本語教育で用いられている新しい枠組みを用いないのかと聞いたところ、私たちにはその方が分かりやすいのだという話でした。私は、常々、学校文法の枠組みは、それによって日本語を習得する必要の無い日本人にはそれで十分かもしれませんが、それによって日本語を習得しようとする日本語学習者にはほとんど役にたたないものだという考えをもっていました。しかし、このような問題点はあるものの、もしブラジルで現代日本語の教育が学校文法の枠組みで行なわれていなかったら、高校の古典文法の教科書をそのまま使うこともできず、古文の文法をどのように教えるかでさっそく迷ってしまっていたことだろうと思われます。もし学生たちが、現在日本語教育で普通に行なわれている国際的なスタンダードに立った文法で現代日本語を習得してきた学生であって、学校文法流の古典文法の教科書を与えられたとしたら、古典文法を習得する困難さは予想を超えるものであったろうと思われます。それ以来私は、国際的なスタンダードに立った現代日本語文法を勉強してきた学生にとっては、国際的なスタンダードに立った古典文法の教科書があれば、ずいぶん助けになるのでないかと思い、いつかそうしたものを作る機会を得たいと思っています。

教育情勢の変化にともない、日本人学生用にもあらたな古典文法の教科書が必要になりそうです。そ